

アメリカと留学と私

北野 収

私にとつての欧米との遭遇は三つの原体験として記憶される。一つ目は、5歳まで住んでいた市ヶ谷界隈の借家のお向かいさんがドイツ人家族だったことだ。フィリップちゃんという同じ年の男の子がいた。人生で最初の友だちは彼だった。鮮明な記憶は無いが自宅に上がり込んで毎日よく遊んだらしい。二つ目は、東京西部の新興分譲地のマツチ箱のような家に引っ越した時のことだ。周囲は立川基地関係者の米軍住宅だった。小学校低学年の頃、ドッジボールをしていてボールがその敷地に入ってしまったことがあった。ボールを拾いに扉をよじ登り敷地に潜り込んだ時、堀の向こう側に映画のような世界があった。ガラス張りの室内プールと日光浴をする家族。その光景に驚き、憧れ、嫉妬したことを覚えている。生活水準の違いを意識した瞬間でもあった。私を含め近所の悪ガキ共は戦争ごっこと称し、アメリカ人の子どもに泥団子を投げていた。

今考えるととんでもないことである。三つ目は、白黒テレビのブラウン管の向こうにあったアメリカである。当時、ゴールデンタイムのドラマやクイズ番組はアメリカの番組の吹き替えだった。日曜の午後はデイズニードラマにかじりつき、いつかデイズニードラマに行きたいと憧れた。後年、日本にデイズニードラマができるとは想像すらできなかった。やがてブラウン管がカラーに替わり、「大草原の小さな家」「刑事コロンボ」に夢中になった。

中学に入り英語の授業が始まった。他の子ども同様、「英語が話せたらいいな」という素朴な学習意欲は私も持ち合わせていた。今から思えば、もっと英語が好きになり上手になれたチャンスはあった。中学に入るとロックやポップスが大好きになった。当時、それらの音楽イコール洋楽だった。人気の四大バンドといえはベイ・シテイ・ローラーズ、クイーン、キッス、エア

ロスミス。前二者は女子に、後二者は男子に人気があった。ボヘミアン・ラプソディのリアルタイム世代である。他にはイーグルス、ポール・マッカートニー&ウイングス、カーペンターズ、カントリー時代のリンダ・ロンシュタットやオリビア・ニュートンジョンなど、今では懐メロともいえる音楽に魅了され、歌詞を翻訳する仕事に就けたらと漠然と考えていた。

英語をものにできたかもしれない最大のチャンスは、大蔵省（現財務省）を辞めて、大学教員になった父親の1年間のカリフォルニア大学バークレー校（以下、UCB）行きだった。だが当時小6の私は、理由は今でも分からないが、一緒に行くことに恐怖を覚え、激しく抵抗した。それが実を結んだのか、幼い弟らの都合か、結局父は原則単身で、母が数か月間断続的に渡米し、その間は叔母の世話になった。中1の夏休みだけ家族全員で父の所に行った。UCBの広大なキャンパスは、私にとってもう一つの原体験となった。

この頃から、私は英語が嫌いになり始めていた。辞書で単語を調べた直訳、記号のような文法の勉強。学校英語が嫌で仕方がなかった。同様に古文や漢文も大嫌いだ。中高の6年間、英語の成績はいつも5段階の2。学校自体が嫌になった私は、高1の時には登

校拒否（不登校）になっていた。私は農学士だがこれ自体消極的選択だった。一番レベルの低い学部、入りやすい学科に滑り込んだのだ（今では農業の勉強をしたことに感謝している）。

学生時代、若者の間には戦後何回目かのIVY（アイビー）ブームが到来した。もともと毎日300円以内で暮らす超貧乏学生の私は、ブルックス・ブラザーズやJ・プレスなどのブランド衣料には無縁の存在だった。本屋で立ち読みをしたIVY系雑誌の情報で、アイビーとはアメリカ東海岸にある私立大学8校のことであり、そこにはハーバード大やコロンビア大も含まれていることを知った。

人生とは不思議なもので、その後紆余曲折を経て、30代の時に二度アメリカの大学院に留学する機会を得た。かつて憧れたアイビー校の一つだった。私は農林水産省の農業経済事務官をしていたが、霞が関・永田町の文化に辟易していた。そんな折、留学制度があることを知り、国外脱出するため、英語の勉強に邁進した。留学中は論文の読み書きがメインで、会話は大きく向上しなかった。何よりも勉強になったのは、日常における様々な多文化経験だった。授業に先駆けて夏休みに英語のインテンシブ・コースに参加した。どの組

でも韓国人と日本人がマジョリテイだったが、ある組で韓国人が日本人と一言も口を聞かないという事件が起きていた。理由は歴史問題だったが、ユダヤ系の担任の先生は実が利いた教育的指導をした。ドイツ人の同僚を教室に連れてきて、日韓両学生の前で対談を披露したのである。両国学生の関係は改善された。

人類学のグリーンウッド先生の「アクシヨソリサーチ入門」という科目は、授業はほぼ全て学生が仕切る実験的なもので、留学生の私には辛かった。ARとは、開発の現場で外部者が住民と協働し、研究とプロジェクトを同時進行させる手法である。私は学生言葉が殆ど聞き取れず、授業中に議論に加わることがなかった。堪りかねた先生に研究室に呼び出され、「やる気があるのか」と叱られた。「クラスメートの英語が聞き取れない」と言い訳すると「それは君が悪い。今度の授業の冒頭に時間をとるから、自分から皆に学生言葉を使わないでゆっくりと話すよう頼みなさい」と助言された。

「国際環境問題」は毎回、熱帯林、酸性雨など環境問題の文献課題をこなした上で、授業は学生主体の模擬国連形式で行われた。後半の回に捕鯨問題の回が用意されていたが、課題文献は反捕鯨論に偏っていた。模擬国連形式で捕鯨の議論をこなせる自信はなかった。

たのは、スリランカ人のウパナンダさん、モザンビーク人のデスーザさん、インド人のサティンさん。ウパナンダは私の倍以上の科目を履修していたがCのオンパレードだった。「なぜそんなことをするのか」と尋ねると、「自分の学費は家族親族一同が払ってくれている。自分のためにだけ勉強するのではなく、できるだけ沢山の知識を持ち帰りたいから」と答えた。母国では運転手つきの高級官僚だったデスーザは教授とのトラブルから学位取得が長期化し、奨学金も途絶え官職も辞した様子だった。いつも真っ赤な目と紫色に変色した顔で、図書館の書庫整理のアルバイトを一杯入れていた。同じ農林官僚同士のなごに国が変われば、留学生活もここまで違う。「日本人が羨ましいよ」と彼は私に言った。サティンに博士取得のため大学に戻ると私が国際電話で告げた時、彼は「キャンパスが懐かしい。でも、もう二度と戻れない。僕らの月給は君たちとは桁が違う。日本人の君が博士を取りに戻るなんて本当に嬉しいよ。アジアの誇りだ」と言ってくれた。デスーザとサティン、私が試験前にいつも「ノートをコピーさせてくれないかな」とお願いしていた仲間だった。アメリカだけが世界ではないことを教えてくれたのは彼らであり、アメリカだけが欧米でないことを教えてく

50人程の受講生のうち日本人は自分一人だから絶対に何かを問われるはずだ。袋叩きにあうのはごめんだと思つた。マクナイル先生のところに行き、直談判をした。「模擬国連の代わりに私に前半の1時間を下さい。鯨肉を食べて育った私がプレゼンをします」。結果はOK。十分に準備をしたプレゼンの後、皆が拍手をしてくれ、紳士的な質疑がなされた。学期末に返却された捕鯨問題に関するタームペーパーには「A+(98点以上)」と「良く書けている。でも私は反捕鯨論者だよ」と赤ペンで書かれていた。ちなみに、私も今は反捕鯨論者である。アメリカ人学生はよく質問をする。質問で先生の話を遮っても叱られないし、先生も頻繁に「質問は」と尋ねる。この対策として私は二つのことを実行した。一つ目はオフィスアワーにほぼ毎回質問に行くことである。二つ目は授業前にあらかじめ質問を考えておき、教室では先生の目の前の席に座り、先生が「質問は」と言ったら直ぐ挙手して指して貰う戦法だ。「その質問はさっき出た」と言われるリスクを回避することができる。次第に「Good question」と先生に言わせることが快感になっていった。

留学先はアメリカだったが、世界中とりわけ途上国の学生と交流できたことは財産になった。特に親しかったのはカナダ人やクロアチア人の留学生たちだった。

博士論文の製本と提出のために最後にキャンパスに戻った時、私の指導教授は遠く離れたニューヨーク市内の自宅にいた。「帰国前に自宅に電話してほしい」と言われていた私は、お別れとお礼を言うために何枚もの25セント硬貨を握りしめ、公衆電話から電話をかけた。携帯電話はまだなかった。その電話で、ずっと気になっていたことを尋ねた。「トム、なぜ私を採ってくれたのですか」「私には君がやり遂げられることが最初から分かっていたんだよ」とハンガリー生まれの経済学者は言った。35歳で役人を辞め、勝算もないまま単身で再渡米してからの数年間が走馬灯のように頭をよぎった。「あなたが僕の人生を変えてくれたんです。ありがとうございます」。私は目頭を押さえながら、そう口走った。

事情が許すなら、獨協生にはどんどん留学に行つてほしい。感受性豊かな若い頃の留学体験は、お金では買えない素晴らしい財産になるはずだ。